

## 令和6年能登半島地震「徳島県災害ボランティア先遣隊」報告会 概要

1 日 時 令和6年2月23日（金） 13：30～15：40

2 場 所 県立防災センター 講堂

3 参加人数 先遣隊報告者 14名  
会場 38名  
オンライン参加者 66名 合計118名

4 次 第 (1) 開会  
(2) 「徳島県災害ボランティア先遣隊」紹介  
(3) 全体概要説明  
(4) 各支援避難所での活動報告  
(5) 質疑応答  
(6) 閉会

### 5 全体概要

#### (1) 派遣目的

徳島県災害ボランティア先遣隊は、県民の皆様にも、今後の災害ボランティア活動につなげていただくとともに、今回の派遣から得た学びを、地域や所属する団体等の防災対策に生かしていただけるよう派遣した。

(2) 派遣者 災害ボランティア 20名  
社会福祉法人徳島県社会福祉協議会  
とくしまボランティア推進センター職員 1名  
防災人材育成センター職員 2名

(3) 派遣期間 令和6年2月13日（火）から2月16日（金）まで

(4) 派遣先 石川県輪島市門前町  
(門前公民館、浦上公民館、諸岡公民館、阿岸公民館)

#### (5) 概要

今回の派遣では、災害ボランティアの受け入れ体制が十分に整っていない中、本県が支援している4か所の避難所で、ボランティアを受け入れていただくこととなった。

活動内容は、被災から約1か月半が経っていたことや、4か所の避難所における規模の違いなどにより、ニーズは様々であり、炊き出し支援、清掃など当初予定していた活動のほかにも、高齢者との交流や、被災後そのままになっている倉庫の整理やガラス・がれきの撤去など、参加者がそれぞれの特技を生かして、被災後なかなか手の届いていなかったところへのきめ細かな支援活動ができた。

一方、感染症防止対策のため避難者との交流を制限する避難所もあるなど、

各避難所の運営方針の違いがあたことや、活動期間が2日間だったことから、思ったように被災者と交流が持てなかったところや、受け入れ側もボランティア側もお互いに遠慮してしまうところもあった。

全体としては、ほとんどの方が甚大な被害を受けながらも明るく前向きに自主的な避難所運営を行っており、日頃からの地域のつながり、絆の大切さが再認識できた活動となった。

## 6 各支援避難所での活動報告

### ■門前公民館

#### 【活動内容】

仮設トイレ・生活水槽の清掃、地下室の片付け、支援物資の搬入、支援物資在庫整理、地下備品倉庫の廃棄物の搬送、公民館倉庫清掃・整理、体育館ガラス割れ処理、案内放送補助、被災者との会話

#### 【報告内容】

- ・ 仮設トイレは雨水を利用して清掃。目立った汚れはなく、普段から清掃がなされているという印象。
- ・ プッシュ型の支援により、水やお茶、オムツ等が山積みで整理されていないため、在庫チェック、整理を行った。女性ボランティアとして、女性用の下着等の在庫チェックができた。
- ・ 倉庫整理では、地震の影響で、棚から落ちて散乱した物資を元に戻す作業や、かなり重量のある倒れたままのテントや看板を元に戻す作業を、ケガをしないように慎重に行った。

中には、祭りの看板やイベント機材、子ども手作りのものなど思い出のある品がたくさんあり、それらを整頓することで、地域の文化継承としての環境整備のボランティアができた。

- ・ 避難者によれば、避難所に仕切りがあると顔が見えない関係になってしまうので、誰とでも話ができる仕切りのない環境が良いという方がおられた。

また、入浴は自衛隊の支援があるものの、家の片付け等の関係上、皆の入浴したい時間が集中するため、お風呂に並ぶ時間を考えると家の片付けがしたいので、1週間に1回入れたらいいという話が印象的だった。

- ・ 感染症対策の観点から、避難者の生活スペースには入らないようにと言われていたが、活動していく中で、避難者の方と信頼関係ができ、コミュニケーションがはかれるようになった。
- ・ 倉庫の片付けや物資の仕分けなど、間接的な活動ではあったが、ボランティアそれぞれの持ち味を生かしながら、丁寧でニーズに沿った活動ができた。

### ■浦上公民館

#### 【活動内容】

炊き出し支援、支援物資仕分け・受け入れ・設置、ガレキ（ガラスの破片、窓枠、瓦）の片付け、飲料水の小分け、在宅避難者への支援物資配達

## 【報告内容】

- ・ 公民館は至る所がブルーシートで覆われ、ホールの窓枠や壁も破損しており、コンパネで補修されていた。玄関も柱と梁の結合部に隙間があるなど地震の爪痕があった。
- ・ 公民館の利用予定表が2023年12月のまま残っており、地域の交流施設として活用されていたことがよくわかると同時に胸が熱くなった。
- ・ 廊下には、入所者が手軽に取れるよう、衛生用品等が陳列されていた。
- ・ 和室の入り口には段差があるため、椅子の背もたれを手すり代わりに使えるよう配置するなど細かい心遣いが見られた。
- ・ 避難者が寄り添い、避難所として自主的に運営されていた。
- ・ 物資ではアルファ化米が大量に残っていた。
- ・ 個人からの支援物資が段ボール箱に混載しており、開封して品目ごと保存期限をみて分類する作業が必要であり、個人からの支援を受け付けられない理由が垣間見えた。
- ・ 毎日の給水前に、前日運ばれてきたタンクの水を無駄にしないために、ペットボトルやポリタンク、給水袋等に小分けして、飲料水保管場所に置く。これも毎日の重要な活動のひとつ。
- ・ レトルトカレーを袋から出してまとめて温めることで、おいしくブレンドされるとともに、個人の食べる量に調整でき、よく考えられていた。
- ・ 炊き出し支援では、衛生面への細心の注意が必要。インフルエンザ、コロナ、ノロなど様々な感染症の心配がある。
- ・ ガレキの片付けでは、安全への配慮が必要。余震があれば瓦が落ちて来かねない状況での作業だったため、誰か一人見ている人を立てる必要がある。
- ・ 避難者とのコミュニケーションでは、丁寧に聴く、共感的に聴くことが大事と感じた。
- ・ 家屋の倒壊による被害が一番大きく、命を守ることが第一である。
- ・ メディアの取り上げ方が段々少なくなっている。もっと現状を伝えるべきであり、SNSを通じて発信していきたい。
- ・ 能登の現状を見て、日頃の防災訓練が機能するののかとの思いを被災者に伝えたら、日頃から備えることの大切さを伝えてくださいと言われた。
- ・ 日頃の絆の強いコミュニティの活性化が、いつか来る南海トラフ巨大地震を迎え撃つ地域力となると感じた。

## ■ 諸岡公民館

### 【活動内容】

炊き出し支援、給水支援、被災者との交流、花壇整備・水やり、避難所仮設トイレ・保育所トイレ・室内の掃除、倉庫整理、支援物資搬入・配付

### 【報告内容】

- ・ 災害ボランティアは、受け身では何も活動ができないが、押しつけになってしまうのも不安だった。
- ・ 炊き出しメニューの張り紙は、得意な被災者が書いたもので、みんなが助け合いながらみんなのためにしているということを感じさせた。

- ・ 炊き出しの配付は、お椀にポリ袋を敷いた上にご飯を入れるなど、お椀を汚さず、水を使わないように工夫されていた。
- ・ ご飯を炊いた大きなお釜を洗うときは、水を含ませたキッチンペーパーをお釜に貼り付けて、釜についたご飯に水を吸わせてからはぎとるなど、少ない水で工夫がなされていた。
- ・ 公民館の近くの保育所も当初は避難所となっており、所長に話を伺ったところ、入所児の安否確認に11日かかったが全員無事だったことが救いということだった。保育所の再開後は、衛生面や感染症対策にすごく気を使いながら保育を行っており、トイレも水が流れないので、子どもたちが触らないようにビニールを敷いた上におむつを敷くなど工夫されていた。
- ・ 住民の方々が元の生活を送れるようになるまで、できる支援を続けていく必要がある。
- ・ この地域では、2007年能登半島地震の時も家屋の倒壊はあったが死者はいなかったのに、今回は死者が出た。耐震化の必要性を強く感じた。

## ■阿岸公民館

### 【活動内容】

公民館内・トイレ清掃、倉庫片付け、災害ゴミの分別、高齢者の話し相手、レクリエーション（阿波踊り、絵本の読み聞かせ）

### 【報告内容】

- ・ 45日目にようやく段ボールベッドが届き、避難者が喜んでいました。
- ・ 厨房を12人で回していたが、2週間前にコロナが流行し感染者が増えたので、できるだけ人数を少なくして運営しているということで、調理の手伝いはしないことになった。
- ・ 仮設トイレは女性専用3つに対して、男性専用は1つ。
- ・ 飲み水以外の生活用水は、山の湧き水をパイプで引っ張ってきて、NPOが提供した濾過器で水を濾過して利用。洗剤は環境も考えて重曹を使用。
- ・ 資材置き場の片付けは、的確な館長の指導の下、壊れた長机をハンマーで分解し、むき出しになった釘で収集者がケガをしないように処理するなど、皆で力を発揮し、たった1日半で成し遂げることができた。
- ・ これまで車で往復1時間かけて自衛隊のお風呂を利用していたが、WOTA（限られた水を循環利用できるシャワー）が届いてからは、いつでも入れると大変喜ばれていた。
- ・ 割れたガラスの片付けは、用意していた防刃手袋をつけて処理、大きめのガラスは、土嚢袋に入れてから足で割ることで、飛び散らずに破片を集めることができた。
- ・ 避難生活には、レクリエーションも必要だろうと、阿波踊りと絵本の読み聞かせをして楽しんでもらった。
- ・ 南海トラフ巨大地震に向け、耐震化の大切さ、家具固定をして命を守ることの大切さ、同時に液状化の確認も必要と感じた。また、避難所生活を日頃からイメージしておくことが大切。
- ・ 電気は避難所4か所とも使えたが、水は断水していた。南海トラフ巨大地震に備えて、山際の谷水や井戸の活用の準備をしておく必要がある。

## 6 質疑応答

【会場からの質問】（会場で応答できなかった回答を含む）

- Q 1 ① 1日のうちのボランティア活動以外の生活はどうだったのか。
- ② 災害ボランティアに行くときに持って行ってよかったものは何か。
- ③ 災害ボランティアを受け入れる場合に、準備してくれていればもっと働きやすかったり、ボランティアを受け入れやすいと思われたことがあるか。
- A 1 ① 道路状況による渋滞等により、宿泊地（七尾市）からボランティア活動を行う避難所（輪島市門前町）まで、往復約4時間を要した。ボランティア活動を終了し宿舎に到着した後は、それぞれが持参したり、近くのスーパー等で調達したりした食料で夕食をとった後、ミーティングを開催し、活動内容や課題等について話し合った。
- （参考（3日目））
- |                  |                   |
|------------------|-------------------|
| 6:45 宿舎出発        | 9:00 ボランティア活動場所到着 |
| 16:00 ボランティア活動終了 | 18:45 宿舎到着（各自夕食）  |
| 19:45 ミーティング     | 20:45 活動終了        |
- ② 今回は、電気が使える、宿舎に電子レンジがあることがあらかじめわかっていたので、食料は、レトルトパックのおかゆやカレーなどを持参。そのほか、入浴ができなかったため、体を拭く厚めのシートを持参したのがよかった。
- また、作業効率を上げるために汗を蒸発させる服は、汗冷えによる低体温症を防ぐ最も大切なアイテムである。汗と空気と風雨対策で体力の大量消費を防ぐことができる服装が大事。
- （スライドで、非常食や、汗冷えを防ぐ服の着込み方を説明。）
- ③ 災害ボランティアは自己完結が基本であることから、受入先への要望はないものの、電気・水道等のライフラインが復旧しており、受入先の近くに宿泊できる場所があれば活動がしやすくなると思われる。

-----

Q 2 スライドに子どもが出てこないのが気になった。子どもはどういう生活をしていたのか。

- A 2 ある公民館では3人の子どもがいて、避難所から学校に通学していた。
- 子どもが散歩に誘ってくれて、自分の家まで連れて行ってくれようとした。時間の関係で家までは行けなかったが、自宅は全壊ということだった。歩きながら地震直後の話をずっとしてくれた。子どもは明るくしているが、心には恐怖体験として残っているので、心のケアがこれからも必要だと思う。

-----

【オンラインからの質問】

（「先遣隊」活動報告書 及び 「先遣隊」参加者アンケート結果等から回答）

Q 3 もし、南海トラフ災害が起きれば、ボランティアを受け入れる側になる。今回の経験から受け入れ側としての留意点や準備、体制、要望点などがあれば教えてほしい。

A 3 災害ボランティアの受け入れは、各自治体において「災害ボランティアセンター」が設置され、被災者のニーズや状況を勘案した上で、ボランティアの募集がなされることとなる。

今回は、被災地の受け入れ体制が十分整っていない中での「先遣隊」であったが、被災地のニーズは様々で、日々変化するため、災害ボランティアとニーズのマッチングやコーディネートが的確にできる体制づくりが必要。

例えば、受け入れ側が、発災前から、災害ボランティアに際して必要な知識をはじめ、災害ボランティアの事前登録や、ボランティア活動指示書（QRコードも）の発行方法、さらには災害ゴミの分別方法等、自治体それぞれのしくみを情報発信してくれていれば、ボランティアに参加しやすくなる。

また、ボランティアの受け入れ状況（必要箇所、受け入れ中、受け入れ済み等）が、地図上等で見える化できるデータベースがあればコーディネートしやすいと思われる。

さらには、ボランティアに参加した方たちの情報交換可能な公的なチャットシステム等があれば、次のボランティアへの参考になる。

-----

Q 4 今回の活動での課題点に対する解決策があれば教えてほしい。

A 4 ・ 避難所運営においては、リーダーシップのあるリーダーが必要。  
災害が起こる前から、地域でのコミュニティを構築し、信頼関係を築いておくことが災害への備えにつながる。

・ 避難所のリーダーが、一人に集中したり、一人で抱え込んだりしがちとなる。

仲間や地域の人を信じて任せ、役割分担することも大切。

・ 避難所では、大勢が狭い空間を共有し、何日も過ごす中で、健康面・衛生面への注意・配慮が何よりも優先される。被災によりダメージを受けた避難所では、仮補修など安全面への配慮も必要となる。

住民一丸となった中で、被災者自身が運営スタッフの一員となり、それぞれの特技や個性を生かした組織づくりや役割分担をすることが大事。

・ 避難所ごとに必要とされるボランティアの活動内容が違っているため、ボランティアを派遣する側と、受け入れる側の事前の密な打ち合わせが必

要。

避難所運営者や避難者によく話を伺ったうえで、避難所運営計画を策定したり、ボランティア派遣したりするべき。また、ボランティアは、押しつけにならないようにすべき。

- ・ 支援物資がプッシュ型で届いているが、本当に何が必要で、何が足りていないかを把握しきれていない。  
支援物資も含め、わからないことが見ればすぐにわかるようリストがあればよい。
- ・ 避難所の高齢者はスマホが使えず、情報源は新聞・ラジオだけのところもあったため、テレビを中心とした共用スペースが必要。  
Wi-Fiも使用できなかったため、避難所になるところは整備しておく必要がある。
- ・ ペット（犬・猫）同伴の被災者は、車中泊や、全壊した家の裏にある納屋で生活していた。  
ペット同伴者の避難場所について、あらかじめ考えておく必要がある。

-----

Q 5 避難者は、避難所でどのような運営活動をされていたか。

A 5 避難所により状況は異なるが、リーダー自らが被災者だったところがあった。また、被災者自らが炊き出しを行ったり、メニュー表を作成・掲示しているところがあったり、トイレの掃除も行き届いているなど、避難者それぞれの特技を生かした自主的な運営ができていた。

-----

Q 6 「先遣隊」に行かれた方は自己完結型でどのような準備をしていたか。今後支援に行く場合どのような準備をすればよいか。

A 6 「先遣隊」参加者アンケートで「役に立った」「不足していた」と回答があった次のものを参考にしてください。  
手袋（背抜きタイプ、防刃、革、ゴム、滑り止め付き、ビニールなど用途に合わせて）、タオル（小さめ）、水、食料（栄養補助食品）、ビニール袋、重ね着ができる服装（下着、中間着はフリースのベスト、アウターはゴアテックス）、長靴、カッパ、ドライシャンプー、ウエットティッシュ、体ふきシート、ウエストポーチ（すぐに取り出せるように必要な物を入れておく）、頑丈な靴、カッターナイフ（支援物資の荷ほどき用）、上靴、ヘッドライト、三角巾代わりにする帽子、パッキング技術、地元の人と話す時の小ネタ（地域ならではのネタ）

Q 7 食料配布で、アレルギー対策はどうしていたか。

A 7 避難所では、被災者自らによる炊き出しや、ボランティアによる炊き出し支援が行われていたが、活動中に見た限りでは、特にアレルギー対応をしている様子はなく、自分に必要なものは、自分で備えておくことが大切と思われる。

※ 避難所運営における課題等は、避難所によって様々であり、これらの課題等が全ての避難所に当てはまるものではなく、「先遣隊」が見てきたことも一部分ではありますが、今後の参考にしていただければ幸いです。